

山岳ぐんま

第105号
平成27年9月10日発行
群馬県山岳連盟
〒371-0005 前橋市堀之下町494-2
女屋 等志方
TEL 027-269-4570
FAX 027-269-4583

編集発行人
群馬岳連編集委員会 岡安茂能
印刷所 朝日印刷工業(株)



チャレンジ キッズ プロジェクト 夏から秋、冬の谷川山系

ジュニア委員会委員長

小泉 俊夫

夏 谷川岳一ノ倉沢

期 日 平成二十六年八月二十四

日(日) 雨天決行

場 所 谷川岳一の倉沢

コース 谷川岳山岳資料館→マチ

ガ沢旧道出合→マチガ沢新
道出合→一ノ倉沢新道出合

→(沢登り)→旧道一ノ倉
沢出合→(沢登り)→一ノ

沢出合→一ノ倉沢旧道出合

→旧道→山岳資料館

募 集 十五名(先着順)

参加対象者 小学三年生→

中学三年生

実参加者 ジュニア七名

(男子五名・女子二名)

参加スタッフ 八名

募集方法 上毛新聞掲載、口コミ、

前回参加者へ案内

参加費 ジュニア三千円(新規参

加者保険費別途)

概要

昨年引き続き二回目のコースであつたが、天候も晴れと(昨年は小雨)最高のコンディションであつた。

事前の下見では小雨降る中を一ノ沢出合まで週行し、今年も去年のように濡れての下山かなと嫌なイメージがわいたが、当日は上天気で参加者も昨年の不安そうな顔の子供たちはいなかった。

出発前の山岳連盟会長あいさつ、

Cしよりの諸注意などの後、スタッフに囲まれ元気にスタート。昨年は濃いガスの漂う中であつたが、今回は何の心配もなく、子供たち歩くのはやはり速い速い。マチガ沢出合での小休止もそこそこ歩き始める。勝手知ったる子供たちは(昨年の経験者四人)マチガ沢キャンプ場への下降を始める。「おい。待て待て」。リーダーの先でやるな「転ぶな」心配した小柄な女の子もなんのことはない、ぴよんぴよんと下る。昨年は湯檜曽川に出られたが、今年は流れが変わり出られない。覚えていた子供もいて「本当だ、崩れてるんだ」と驚きの声を上げる。昨年同様出合でハースを付ける。参加者も少ないのと四人が経験者なのでスムーズに準備完了。いよいよ沢登り開始だ。昨年と少し流れが変わり?すべて流れの中を歩く。旧道に出る少し手前、昨年は無かつたのだが、大きく太い流木が滝の落ち口に十五度位か?立ちかかつていた。当然滝を巻き滝上に出たが、女の子二人が滝の下でその丸太をじーっと見つめ、すーっとそれを登り始めた。「おいおい」と口に出したが、丸太は乾いているし下は深水なので見守ることにした。あつという間に登り切り二人目の女の子も登ってしまった。「そーか、アスレチックでこんな



のがあったか」「幼稚園？なんかに」

昨年濡れていて三人がスリッパしたスラブのトラバースも、難なく通過し旧道に出る。

好天に恵まれたため旧道出合は観光客でかなり混雑している。小休止とハーネスの点検をし「サー本番だぞー」の声で皆動き出す。快調だ。「あれ、あんな子たちがあんな所に行くよ」の声を聴きながら、旧道上の最初の滝に取りつく。今回もこの滝に時間がかかる。

しかしこの先のルートはフィックスロープと岩の乾きで、問題は無い。足のコンパスの長さに不利、有利が多少はあるが、楽しい沢登りが楽しめた。昨年の子供たちに

も、この快適さを味あわせてやりたいと思った。一ノ沢出合の大きな岩の上で衝立岩をバックに、「やったー」の歓声と一緒に記念撮影をして下山開始。旧道出合にはうれしい豚汁が待ち受けていた。

修了証授与式で「また来るか？」の問いに「うん来る」と返事をして、その子は親の承諾を得るように親の顔を見る。我々スタッフも思わず安堵した。

今回の参加者不足は、夏休み最後の日曜日ということも原因の一つであった。新しい参加者獲得のために広範囲にアピールする方法にも問題があったと思えるが、なかなか難しい問題だ。

自己満足ではあるが、全員怪我もなくまずは成功であった。

担当スタッフ

・CL 金子一実 ・八木原 罔明・吉田直人・木暮文彦・大和亨・三田治宣・後藤文明・写真小泉俊夫

装備

・ザイル 六本（内二本購入）・ハーネス 七セット（日山協借用）・カラビナ 三五枚 ・ハーケン 六枚 ・シュリンゲ 三五本 ・救急用具

秋 谷川岳マチガ沢大滝 ロッククライミング

期 日 平成二十六年九月二十八日（日）

場 所 谷川岳マチガ沢大滝

コース （七・〇〇発）谷川岳山岳資料館（七・四〇発）



マチガ沢S字スラブを登る

実参加者 十三名 厳剛新道を同行保護者十名

参加スタッフ 十四名

募集方法 上毛新聞、口コミ、前回参加者へ案内

参加費 ジュニア 三千円（初回者は四千円）

概要

偵察時は、厳剛新道を見晴らしまで登りS字の上部に下りた。水量の多い大滝を偵察しながら、「本番にこれだったら子供たちのロッククライミングは無理だね」の会話をし、そのまま本谷を下った。水量の多いS字状に、子供たちの登る姿を思い浮かべ、頭を悩ませた。本番当日の朝は「良かった快晴だ」胸をなでおろす。

今回初参加の子供は二名で、うち一人はクライミングジムなどに通う。前回に「また来るかい」に「うん来る」と答えてくれた二人の女の子も参加してきてくれた。

マチガ沢は一ノ倉沢のトラバースと比較して縦に登る感じで、当然であるが、落石や滑落には細心の注意が必要だった。子供たちの年齢や経験を考慮し、三班にグループ分けをした。フィックスロープ、ビレーも完璧を目指した。結果落石やスリッパもなく大滝まで行くことが出来た。実際子供たちには登ることに何の問題もなく、乾いた

た沢筋の岩肌をどんどん登ってしまった。「上手いものだ」

大滝でのクライミングはフィックスを張らず、ビレーにより安全を期した。大滝下の約二〇mを子供たちにルートを選ばせ好きに登らせたが、それぞれが二つのラインを選び大滝下に到着集合。当然大滝もビレーによりルートは好きないように登らせた。また、大滝の下降はクライミングダウンで下らせた。高度感もものとせず、スタッフのルート指示で完璧なクライミングダウンだった。乾いた岩肌の感触は、子供たちにとって最高の体験だった。

但し登攀が終わった滝上のスラブで子供たちがはしゃぐので、スタッフの大声があり、子供たちも驚いたろう。（危ない危ない）騒がなければ何の問題もないが、それぞれのセルフビレーが必要だったとも思える。

保護者は大滝の下での見学で、



マチガ沢大滝下へ



大滝を登る女の子

大滝へ行く下の岩場のクライミングは落ち着いて見ていられたようだった。残念なことに、本当の大滝のクライミングは岩陰になり見学はできなかった。

偵察時と違い、好天に恵まれ最高の一日だった。巖剛新道を保護者と下りながらの話の中で今回の経験の子供たちや保護者の感想は、非常に良かったと思われる。

課題は残したが、天候と、スタッフ、子供たち、保護者に恵まれ、まずは成功であった。ご苦労様でした。

担当スタッフ

CL 金子一実 A班リーダー

金子一実・田村元臣 B班リーダー

三田治宣・内山 栄 C班

リーダー 茂木矩行・高橋守男・

須田久男 フィックスリーダー

小暮文彦・吉田直人・阿部勝久

○保護者対応、写真 八木原罔明

・小泉俊夫 ○フリー（保護者見

晴らしへ）後藤文明・石井美鈴

装備

・ザイル（フィックス共）七本
・カラビナ三十枚・シュリング
三十本・ハーネス十四組（日山
協借用）・無線機二台（茂木・
医薬品・ヘルメット 二個

冬 スノーシューで巡る 湯檜曾川沿い

期 日 平成二十七年三月十五日

（日）

場 所 谷川岳湯檜曾川沿い

ノ倉沢出合往復

コース 土台山の家ノ倉橋ノマ

チガ沢出合ノ倉沢出合

ノマチガ沢出合ノ倉橋ノ

土台山の家

募 集 十五名（先着順）

参加対象者 小学三年生ノ

中学三年生

実参加者 七名（八名中前日風邪

熱で一名キャンセル）同

行保護者五名・前泊者は

保護者二名、子供三名

参加スタッフ 八名

参加費 三千円（前泊者は宿泊費

別料金で個々に支払）

概 要

昨年は、一泊二日（土日）で前日にスノーシューの練習と雪洞掘を体験し、夜は雪山の勉強会をやったが、今回はその時間が取れなかった。時間の取れた前泊の参加者五名（親子二名子供三名）スタッフ六名、土台山の家で夕食と懇談後、日山協ジュニア情報交換会で

やったパワーポイント（一昨年からのチャレンジキッズプロジェクトノ倉沢二回、虹芝寮、スノーシュー、マチガ沢）を利用して皆（山の家の人達も）と見る。

翌朝曇り空だが時間内に全員集合した。一名だけ「やっぱり熱が下がらないので欠席です」の電話も入る。

いっなくなきちんと準備体操をやる。がスタッフには大変だった。長くて。

慣れたせいかわ今回は途中で遊ぶこともなく、マチガ沢出合着。相変わらずの曇り空だが、何となく山頂の稜線が見える。皆疲れた様子は無い。「さあて行くか」のリーダーの声で湯檜曾川に下りる。昨年はここから堅炭岩などの稜線が見えたのだが今日は見えない。そのせいか昨年のように横一文字での競争は無かった。だが速い速い。まったく疲れを知らない子供



大滝上のスラブで

たちだ。やがてというかあつという間に一ノ倉沢出合に着いてしまった。

相変わらず雲が出ていて、一ノ倉沢の大岸壁は残念ながら見えない。雪崩に注意をしながら芝倉沢側に渡り昼食とする。

昼食後ビーコンを使って宝物探しの開始。使い方の説明に最初は理解が出来なかったようだが、二ノ倉沢で理解してしまった。八台のビーコンを全員に渡し、隠したビーコンを探すのだが、慣れてくると早いものだ。迷わず探せるようになってしまった。こうなるとやめられない。「あと何回」「あと何回」ようやく納得させて終了とする。

「帰るぞ」の号令でビーコン遊びの樹林から出ると、なんと、雲が切れて一ノ倉沢の岸壁が見えている。我々、保護者、子供たちみんなで素晴らしい景観に見とれる。記念撮影をして下山開始。マチガ沢出合にて休憩、昨年の経験もあり今回はみんな慣れたものであった。天候も良くなり景色も見えて、のんびり休憩をする。昨年はかなりの入山者がいたが、今回は他に行ってしまったのか静かな湯檜曾川だった。

土台山の家駐車場では装備の回収、点検後、山の家を借りて感想やら講評をして修了証を授与する。決まり文句になったが「また行こう



一ノ倉沢出合で

な」で解散とする。

今回は天候不安と一日しか日が取れず、朝集合でそのままスノーシューを履き雪の中を行動したが、何か物足りなさがあったような気がする。ビーコンの宝探し？があつたからいいようなものの。冬は一泊二日で一日目、二日目とそれぞれが目玉を作る必要と、夜には保護者も交えた交歓会のようなこともあつたらと感じた。

コースについても他の山域を選択するには、現地集合や保護者の送迎の可能性を考える必要がある。

担当スタッフ

CL 金子一実 SL 吉田直人

吉田文江 佐藤みどり 根井康

夫 小泉俊夫 毛呂憲治 阿部悦子

装備

・ザイル一本・ビーコン八台

・ゾンデ棒一・スノーシュー

十五組・オーバースューズ十五

組（ジュニア用）・医薬品一式

アバランチトレーニング研修会

登山指導委員会 角 田 守

二〇一五年一月一八日、土合山の家周辺において雪崩対応についての研修会を開催いたしました。

以前より指導委員会の方向性として、より公益性、社会貢献性を考えた企画・募集を目指してまいりました。

県外からの一般参加者が過半数を占め、目指す方向性に近づいていることを実感することが出来たと同時に、広報のチャンネルを如何にするかがより重要であると改めて確認させられました。

主任講師に角田（前橋山岳会）、講師に阿久津（太田山岳会）、西



巻（沼田山岳会）、桜澤（同）、毛呂（前橋山岳会）を布陣し、三〇名の参加者に対し、まず主任講師が説明・実演し、六名毎に班分けをした研修生を各班担当講師が其々を指導する体制にて行いました。

雪崩発生の原理、弱層テストに始まり、雪崩事故に遭遇してしまつた時の対応を中心に研修を進め、一連の作業を細分化し理解度を深めて戴いた後に、通してシミュレーションを行い流れとして理解して戴けるよう組立て致しました。

研修内容は、とても一日で伝えられるものではなく、また一度で覚えられものでもありませんので、色々な機会を利用しての反復にて理解度、習熟度を上げて戴くようご案内も致しました。

当日の天候は、低気圧の通過で前半が吹雪、後半が強風と芳しくない中、遠方よりお越しの一般参加の方々も大きな遅れなく受付を済まされました。

終了後一般参加の方より、「あまりにも廉価の参加費で、内容も啓蒙的なものと思っていたが、一日みっちり・しっかりとした内容に

びつくりした。社会貢献活動の発想での企画に感動した」と、お礼の言葉と握手を求められ、講師としても感激致しました。

雪上技術講習会

登山指導委員会委員長 星 野 俊 充

二〇一五年四月一二日、快晴の下、谷川岳マチガ沢（S字手前）において雪上技術講習会を開催しました。

私の不手際で開催通知が遅れたため参加人数としては初級中級合わせて十一名と少なくなつてしまいましたが岳連新規加入の高崎経済大学山岳部、及び一般の参加者が数名ありました。一般向けの広告媒体としてSNSの有用性を改めて感じる次第です。

統括・中級主任に角田（指導委員会）、中級補助に小和田（遭難対策委員会、初級主任に桜澤（遭難対策委員会）、初級補助に阿久津（同）の四名を配しました。

今回のカリキュラムとして次の課題を行いました。

- ①危険箇所の通過
- ②歩行技術の基礎
- ③滑落停止
- ④初級・歩行実践
- ⑤中級・支点構築
- ⑥中級・スタンディングアック

今後も指導委員会では、社会貢献を念頭にした企画を星野委員長のもと行つて参りたいと考えております。

スピレー

⑦エマージェンシー

受付・自己紹介を早々に済ませ講習会予定地へ向かい、途中危険箇所（雪崩発生多発地帯）の通過についての講習を行いました。実際にデブリ上を通過するため参加者の後姿から緊張感が窺えました。

午前の内容としては合同で歩行技術の基礎をしつかりと実践してもらいました。その後、雪上技術



講習会の花形である滑落停止を行いました。当日は天気も良く雪も大分柔らかくなつており、暖斜面であるにも拘わらず止まるまでに大分距離を滑つており、これが急斜面だつたら「本当に止まるのか」という疑問を参加者に持つて頂けたと思います。雪山での遭難原因で一番多いのが転滑落ですが「転んだら」では無く、「転ばない」の重要性を講師の言葉と合わせて十分理解して頂けたと思います。

午後、初級はマチガ沢より西黒尾根への斜面を登下降してなるべく多く歩いてもらいました。僅かな時間ではあつても帰つてくるべきの足取りは大分見違えるものがありました。

中級はプラットフォームの構築から支点の作成、及びその支点に對しての荷重確認をしてもらいました。作り方次第で強度が左右されることを知ってもらえたと思います。

今回の講習会も、一日で行うには課題が多く参加者にとっては忙しい講習会になつたと思います。時期や開催日程の都合上ご理解して頂ければと思います。

指導委員会としては今後も世間の常識ではなく、本当に必要とされるもの（技術）は何かという視点に立ち各種講習会を開催していきたいと考えております。

三月の群馬岳連救助訓練

前橋山岳会 毛 呂 憲 治

平成二十七年三月一日に土合の赤沢山にて、積雪期の救助訓練を行いました。天気予報は雨でしたが、幸い雪。合計十二名の隊員が参加しました。新体制となつて、二年目の冬。今までの訓練の集大成として、シミュレーションを行いました。今回のミッションは、

赤沢山の山頂付近の尾根から、白毛門側に一名滑落したとの想定で、救助に向かうというものでした。朝の挨拶を軽く済ませ、早速、現場に向かいましたが、予想以上に雪が悪く、思った以上にペースが上がリません。ワカンやスノーシューは使わずに、つぼ足で目的

地まで行く計画でしたが、どうにも進まないため、ワカンを装備し直して目的地まで向かいました。

目的地に到着した時には、天候もさらに悪化し、吹雪となつていました。今回は訓練ですの、打ち合わせのため、スノーブロック



急な雪面でのストレッチャー搬送



梱 包

一五〇mまで検索し、上部はそれの引上げ準備を行いました。救助訓練の引き上げは、メインザイルとは別に、引き上げシステム（ピグリグ）を作ります。

今回使った1/4ピグリグシステムは、ダブルプリーを二個とスタティックロープを使います。外部システムにすることで、ロープの結び目を通過させる際、引き上げシステムを組み直さなくても良いので、非常に効率よく引き上げを行うことが出来ます。

救助隊員のほとんどは、働き盛り、子育て世代です。転勤や家庭の都合で、残念ながら除隊するメンバーもいますが、今年度から新たに五名の隊員も加わります。今まで教わってきたことを伝えていくとともに、個人のスキルを上げることで、隊としてのレベルアップにつながるよう、頑張っていきます。



遭難者を背負っての引き上げ



立木を利用した雪上搬送

五月の群馬岳連救助訓練

前橋山岳会 上原 祐一



遭難現場へのルート工作



ロープによる5分の1システムでの引き上げ

垂下降。こちらも

中間支点の通過に難儀しました。フィックスロープの登下降、しっかりと身に付けないといけません。続いて、引き上げつりさげです。宙吊りになったクライマーを想定して1/5システムで引き上げました。まず、宙吊り状態となったクライマーの所まで検索をかけ状態を確認します。そして、救助者をスタティックロープで要救の所まで降ろして確保し、要救側のロープを切断。上で1/5システムで二人とも引き上げるとい訓練です。私にはまだまだシステムはわかりませんでした。しかし、私は今回要救の役をやったことで感じた事をこれから活かしてい

ければと思います。最後、怪我人の搬送です。スケットドストレッチャーで要救を梱包します。急な下りではコンティニューアスグリッブピレイで降ろします。また、大木、沢など様々な障害物の中、隊員一致団結する事で安全、素早く降ろす事が出来るんだなと感じました。今回、私には覚えきれない点多々ありました。しかし、数をこなして経験することで身に付いてくるはずです。救助という命に関わる行動、おろそかには出来ません。自分自身、また隊全体で意識を高めることで、よりいっそう活動を意義のあるものにしていければと思います。

平成二十七年五月十七日、太陽がさんさんと照りつける中、赤沢の岩場にて群馬岳連救助訓練が行われました。二十七年度初の訓練です。いや、私にとっては「年度初」どころか「人生初」の救助訓練であつたのです。そうです。今年度から救助隊に入隊いたしました。会の先輩方は前々から隊員として活動しており、自分もいつかは！と強く感じていました。そ

んな中、今年度より入隊というお話を頂きました。訓練に向けて、まだかまだかと待ちわびておりました。と言つても、山岳会に入会してまだ二年となりません。毎週末山行を繰り返してきたものの、まだまだ未熟な点が多く、不安も感じていました。

うものかというのがわかる気がしました。「命」に関わる行動をするんだと、気を引き締めます。岩場まで移動して訓練が始まります。先輩の隊員方が岩壁を登り、フィックスを張ってくださいました。他の隊員方がどんどん続きます。よし、我々も！とその前に新人は下部でみっちり確認です。最初の訓練はフィックスロープの登下降です。普段なかなか使わないユマールで登ってからの下降。基本となるこの動作、必死になります。確認後、い



岩壁に残された遭難者の救出



ストレッチャーによる沢の中の搬送

「道迷い」シンポジウム出席報告

遭難対策委員会委員長 町 田 幸 男

三月十四日(土) 関西大学キャンパスにて道迷いに関するシンポジウムが開催された。共催は日本山岳SAR研究機構、日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟の三団体で、更にNPO法人Mnnp、日本オリエnteering協会が協賛した。国内での遭難態様はここ数年道迷いが約五〇%を占めており増加の一途をたどっている。しかしながら、道迷いに対する原因の究明や対策について今まで関連団体による意見交換はなされてない。今回のシンポジウムの趣旨は、どのように道迷いに対し対策を講じていくべきか主たる組織の意見を交わす場とし、今後の活動の一助となることを願うものである。

第二部は道迷い経験者による報告が労山より三件行われた。一件は石鎚山での単独遭難、もう一件は前穂奥又白での下降ルートを見失い、ピバークに陥った事例。興味深かったのは三つめの発表で、読図講習会で講習に没頭しすぎたあまり時間を忘れ、挙句の果て道に迷いワンピバークした事例である。どれも、報告を聞いていると確かに初歩的な間違いを犯しているように思える。冷静に考えればわかることであるが、道迷いには冷静に考えられなくなる何かの要因があるようである。

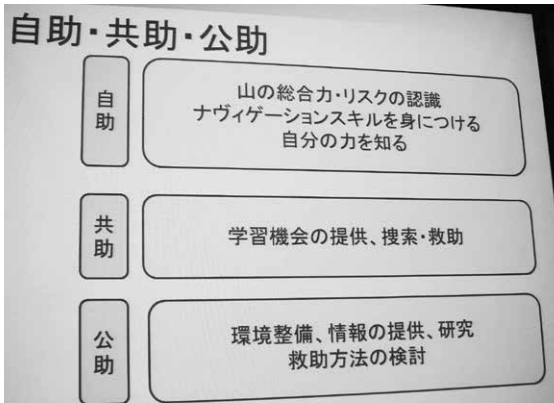
第三部ではこのような要因がな

んであるか分析した結果が報告された。発表は道迷いに関する研究の第一人者、関西大学の青山教授が中心に行った。教授が十数年行ってきた敷山での道迷い実験データは延べ数百人分にも上る。データから伺うことができるのは、道迷いでは行動スピードがきわめて遅いこと、目測による距離感はまったくあてにならないこと、藪が薄く平坦な地形を選んで歩く傾向があり、目的の方向から外れている事に気づかないのが特徴らしい。もちろん、これには空間を認知する能力の個人差が大きく影響するようだ。これらのデータを分析することで予防はもちろん、捜索に関しても何かのヒントになるかもしれないと思った。

第四部は対策についての発表で



シンポジウム開催風景



自助、共助、公助について

あった。地図読みに関する講習会については増加しつつあるトレランナーからの要望が急増しているらしく、参加理由は「道に迷いたくない」が圧倒的らしい。村越教授からは従来の読図ではなくナビゲーションを行える「地図読み」能力を指導すべきとの意見があった。

つまり、大切なのは正確な磁北を知ることではなく、自分がどの方向に進んでいるのかを常に把握し、次の目標物を置いたナビゲーションが大切とのことであった。

日山協の西内委員長からは昨年の全山遭で発表された那須における道標整備による道迷い対策が報告された。那須は国立公園内であるため、新たな道標設置は大変難しいが、現設の道標に目的地名までの距離表示や現在地を表す番号を追記することは認められるらしく、道迷いの抑止に効果を上げている。また、無数に広がる荒地の踏み跡に石を並べて登山道を整備し、ポイントごとに現在地を示す番号を掲示した。この取組後道迷いによる通報はゼロとなり、明らかな成果を上げているようである。道迷いでの捜索に対しては、以前にも紹介したヒトココについてラジコンヘリのドローンを使った検証結果が報告されていた。御嶽の噴火でも、もし遭難者がヒトココを

持っていたならばもっと容易に捜索が可能であったかもしれない。

まとめに、今後取り組むべき活動として村越教授から「自助共助公助」についてのお話があった。より多くの登山者がナビゲーション技術を習得(自助)するよう、講習会等による技術指導を実施し(共助)、登山環境に即した登山道整備等(公助)をバランスよく推進していく必要がある。これらの活動に対し今後我々がどのようにかわり、推進していくのが次の課題ではないかと締めくくった。

我々が所属する山岳会では道迷いに関する遭難事例は全くと言って良いほど聞いたことがない。しかし、ほとんどの人が道に迷った経験があるはずである。この経験は「道迷い」ではなく「道間違い」なのである。つまり、間違いに気づき修正する能力を備えているからこそ道迷いに至らず自力で生還して来たわけである。

群馬県内でも昨年は八十八件の遭難事故が発生しており、この中には道迷いも相当含まれている。岳連としても地元山域での遭難を少しでも減らすべく、一般登山者の能力向上「自助」に貢献できる教育活動「共助」を促進するとともに、公共機関と連携した環境整備等「公助」の活動に積極的に取り組みたいと考える。

JMA

守ります。美しい日本の山。

山岳保険の加入は 登山者のマナーです。

あなたの山岳保険は、大丈夫ですか？

■平成25年山岳遭難の概況

(警察庁生活安全局地域課 平成26年6月12日)

発生件数 **2,172** 件 (前年対比 184件増)

遭難者数 **2,713** 人 (前年対比 248人増)

死者・行方不明者 **320** 人 (前年対比 36人増)

詳しくは → <http://www.sangakukyousai.com>

お問い合わせは

日本山岳協会 山岳共済会

事務委託：日本山岳協会山岳共済事務センター
月～金 10:00～17:00 (土・日・祝日除く)

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 3-7-11-707

TEL: 03-5958-3396 FAX: 03-5958-3397

E-mail: sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp

U R L : <http://sangakukyousai.com>

山村地域での救命救急と 救助技術シミュレーション

群馬岳連遭難対策委員会 神 垣 聖 子

(前橋山岳会)

平成二十七年六月六日から六月七日、国立赤城青少年交流の家で特殊環境での救命救助の研修が行われました。主催は群馬大学医学部附属病院 協力・群馬JPTEC協議会・群馬防災航空隊・群馬県山岳連盟救助隊 参加人員・医師・研修医・看護師・医学生 講習スタッフを合わせて約五十名の参加です。岳連救助隊の協力は今回で三回目になります。

かを解説し、レスキュー活動をシミュレーションで体験する研修です。

一日目の午前は群馬大病院より「群馬県の救急体勢と遭難救助事例解説」「救命処置と酸素投与・鎮痛処置」岳連救助隊長より「厳しい環境での救助」として講義、群馬JPTECより「病院前救急論」として実習です。午後は野

群馬県を取り巻く山村地域には、いつ急変してもおかしくない高齢者や疾病罹患者が多数生活しており、自然環境を楽しむために多くの方が訪問されます。中には健康不安を持つ方もおられます。山間部において傷病者が発生することは稀ではなくこうした現場に医療や救助の知識が求められるケースは増加しています。こうした背景を受けて要介護者の置き去りを防ぐためにどのような救助されるの



チロリアンブリッジによる搬送デモ

外で「初期評価」「全身観察」、岳連救助隊より「特殊な環境からの搬出技術」を実習しました。道具を使わずに搬送できるドラッグ法・ハンドブロック・ヒューマンチェーン法を、次にザック・レインウエア・ストック・救急用のテープなど登山時の持ち物を使った搬送を紹介し体験してもらいました。一、二名での搬送より複数名、持ち物を使った搬送の方がはるかに楽で有効であるか実感してもらえたようです。



防災ヘリによるつり上げ体験

二日目は群馬防災航空隊によるヘリコプター救助の



バックボードを使用した固定搬送

実演です。ヘリによる吊り上げ・搭乗体験・救助技術を学びます。昨日と変わって風もなく穏やかな晴天をへり

は今回の総まとめとしてグループに分かれ噴火を想定してのトリアージ、谷底の傷病者の処置と搬送のコンペティションです。私、傷病者として横になり搬送されながらこんな事を感じました。焦ると注意事項を見逃す。グループは役割分担されリーダーがいると仕事事が早い。傷病者は状況説明や声かけがあると安心する。まさに、自分へフィードバックです。

日和田ねと喜んでいましたが数名が体験したところでヘリに出動要請が入り、クラクションを鳴らして現場に向かってしまいました。さて、ヘリによる実演が出来なくなってしまうので岳連救助隊からチロリアンブリッジによる移動や懸垂下降などを体験してもらいました。昼食をはさんで午後から

宿泊する研修会には夜に懇親会が必ずあります。そこで質問から始まった会話です。「せつかくの休日を手伝いにあててもつたいないんじゃないの?」「山岳会では山のレスキューを学べますけど引渡しまでです。その先は知らないからと薦められて・・・先生もせっかくの休日ですけど?」「患者さんが手術室でベッドの上に寝た状態で、そこからしか知らないから。同じだね。いい機会だね。」と。受けた質問を翌日、JPTECの方にしてみました。答えは一緒でした。分野違いの者がそれぞれに関わり救助救命が成り立ち、お互いの役割を知る有意義な二日間でした。政策などで耳にするウインウイン。この研修に協力という形で携わっていますが、それではないでしょうか。

西邑楽高校から群馬岳連指導委員会に講師派遣の依頼があり、対比地昇（指導委員会副委員長）、角田守（指導委員会理事）、津久井早苗（救助隊員）の三名が講師として参加した。

スポーツ科一年生（男子二十三名、女子十六名）を対象にして毎年行われている一泊二日の学校行事であり、猿ヶ京の高原千葉村を宿泊地とし、登山とカヌーを実施している。登山はロープウェー、天神尾根コースを利用しての谷川岳山頂までの登山を実施している。生徒、引率教諭とも登山の経験はあまりなく、装備、服装など不十分な面もあるが、歩くペースは速く、さすがにスポーツ科の生徒である。あいにく、小雨交じりの天気、周りの風景を楽しむことはできなかったが、スポーツに打ち込んでいる高校生らしく、礼儀正し

く明るい雰囲気、登山を楽しんでいた。

主な任務は安全確保であるが、トップ、ミドル、ラストを分担し、

道迷い、けが等ないよう

に安全を確保しながら

歩いた。また、開校

式では登山というス

ポーツについて概略の

説明、閉校式では実際

に登山をしての講評と

いうことでまとめの話

をした。

〔日程〕

平成二十七年七月六日

(月)

九時 ベースプラザ六

階集合 ロープウェー

にて天神平へ

九時三〇分 開校式

九時四〇分 登山開始

十時二〇分 熊穴沢避

難小屋

十時五五分 天狗の留

まり場

十一時三〇分 肩の小

屋

十一時四〇分 谷川岳

(トマの耳) 肩の小屋

にて昼食休憩

十三時 下山開始

十四時四〇分 天神平着

ロープウェーにてベースプラザへ

十五時三〇分 閉校式

群馬岳連個人会員委員会

平成二十七年第五回

交流登山報告——唐松岳——

個人会員委員会 志 村 賀津雄



ケルン↓唐松岳頂上山荘
↓唐松岳↓往路を戻り
入浴↓帰還

白馬村を舞台にした、
長野冬季五輪。アクセス
道路、建物、街並みの雰
囲気が競技期間の賑わい
を彷彿とさせる。車中、
白馬連邦が近づくにつれ
て、あれは鹿島槍、五竜、
白馬と指差し、「すてき」
と声が上がリ、カメラを
向ける。

「野遊びの成功は、天
気次第」と言われるが、
梅雨も終わらない季節な
のに、空も私たちに身方
をしてくれた。

九二〇、八方尾根ゴンドラリ
フト「アダム」に乗車して兔平駅、
リフトを二つ乗継、黒菱平、十
〇〇、第一ケルン到着。白馬連邦
のパノラマが、目の前に近い。「白
馬三山」左から、白馬鎗ヶ岳、杓

子岳、白馬岳、山肌に雪渓が残り、
岩肌とのコントラストが美しい。
重いザックを背負い、山に登った
ご褒美の景色が目の前に広がる。
八方池山荘前にて、岳連スタッ
フの指導により準備体操。三組に
分かれて登山開始。八方池までは、
木道と良く整備された登山道、全
般的に緩やかな登りになる。所々、
息が上がリ徐々に高度を上げて行
く。

一一二〇、八方池到着。ここ
までは、季節天気を選べば、家族、
一般のハイカーでも気軽に訪れる
ことができるハイキングコースと
なっている。鏡のような水面に上
下対象の白馬連邦を映す八方池
「ここよ、白馬」と見入ってしまう。
登山には無縁の家族でも白馬連邦
の美しさには心を打たれずにはい
られないだろう。
白馬連邦の登山ルートは幾つも
在るが、八方尾根から唐松岳コー
スは、豊富な高山植物が出迎える
晴らしい眺望を目の前に楽しみな

期 日 七月十一・十二日
参加者 個人会員 二十名
岳連スタッフ 八名
主行程 前橋・高崎からバス、八
方アルペンライン（ゴンドラリフ
ト、リフト二つ）↓八方池↓丸山

がら無理がない。八方池からは、本格的な登山コースとなる。右手に、堂々貫録の白馬三山、登山者を拒むような稜線の不帰ノ嶮、左手に、きりり双耳峰の鹿島槍、筋肉隆々の五竜岳を堪能しながらゆつくりと足を進める。登山道には「ハッポウウススキソウ」など八方尾根の固有種を始め、雪渓、湿地を好む「チングル」の群落、紫が鮮やかな「タテヤマウツボグサ」の花々が我々を迎えてくれた。皆、カメラ、スマートフォンを手に登山道に這いつくばり、思い出を写真に収めた。

途中、夏山ルートに雪が残りヤセ尾根を歩くルートが2箇所ほどあった。七月中旬でも扇雪渓と幾つかの雪渓を渉る。軽アイゼンを装着するのにも一興であり、私は夏山に雪の上を歩くのが好きだ。北アルプス方面は観光地でもあり登山道は、危険な箇所も無く快適な登山が出来た。

十五・三〇、私の最終組六人が唐松頂上山荘に到着。気温が高く暑かった。ザックをデポして頂上へ向かう。十六・〇〇、唐松頂上到着。ガスが出はじめて遠くの山々がはつきりしなかった。明日、時間が許せば、もう一度登りたいものだ。唐松岳の良さは、



白馬三山、五竜岳の眺望であろう。深田久弥は、「白馬岳を南北の縦から望んだ姿が好きだ」、「立派な五竜岳を見たい人は、唐松岳の上から眺めることだ」と日本百名山に記してある。きつと、この唐松岳山頂に立つたに違いない。

年一度の山小屋泊まりの最大の楽しみは、参加者交流の宴会であろう。小屋に戻り、夕食前早々、テラスにて、お酒を飲む飲まないにかかわらず皆が集まり宴会が始まる。この為にワイン、日本酒を担ぎ上げた肩への重さを忘れさせる至福の時である。小屋には、生

ビール、アルコールの自動販売機まで設置されている。一時宴会を中断し、山の楽しみであり食べることの大切さを実感する夕飯の時間。食堂が空くと、何となくまた集まり宴会の続きが始まる。窓際に、剣、立山連邦のシルエット、美しい夕焼けを眺め、星を数えながら、飲み物を傾け、終わることがない「山」の話題が続く。

二日目、四・〇〇、ご来光を見に小屋の裏に向かう。四・二五、真っ赤な太陽がゆつくり登る。地平線越しに見る日の出は、何か神々しい気がする。

前日、私は、小屋への到着が遅くなったので、山頂からの景色を堪能出来なかった。朝食後、私と、他一人、スタッフ二人の四人で、頂上へ向かう。早い時間もあり登山者も少なく静かである。近くで鳴き声がある。登山道の足元すぐ側にライチョウの親子、雛が四羽、ハイマツの間を可愛らしく歩き回る。雲一つない山頂からは、剣、立山、槍、穂高、すぐそこには、白馬、五竜岳の眺望が素晴らしい。

七・二〇、下山開始。八方池で大休憩、全員の集合写真撮影。皆、日頃の訓練もあり、怪我、体調不良もなく無事下山できた。

計画から実施まで多岐にわたる指導をいただき、岳連スタッフの皆様には感謝いたします。さらに「山」に対する思いが深まり、下山するのが惜しい一泊二日の山旅であった。ああ 楽しかった。

こんなテクニク知ってますか？ 茹でないスパゲティ

大間々山岳会
福田 純 一

茹でる燃料、大きいコップ、吹きこぼれも茹で加減の心配も不要にする技術です。

ごく普通の乾燥スパゲティを用意してください。

まず、たっぷりの水に二時間くらい浸しふやかします。(朝食用に前夜から、定着のテント出発時に晩飯用など) 長い麺が入るコップ、フェルなどないでしようから二つか三つに折って仕舞いましょう。実は箸で食すには、折ったほうが楽なのです！

さて調理ですが、具材をお好みの方法で炒めます。八分どおり火が通ったら先のふやけた麺をすくい出し具材と一緒に炒めます。白くふやけていた麺が加熱によって見覚えのある透明感とツヤに変わってきます。食感と味付けの確認が

OKなら、はいっ出来上がり！麺がまだ固いようなら差し水して更に炒めます。

レトルトの具材を使うなら湯で温めるのでなくコップフェルに付けて麺に絡めながら加熱します。温めたソースをよそった麺にかける方法は、そもそも間違いないのです。

ここからは調理のテクニクです。味の決め手はたっぷりのニンニクです。潰して刻んだら(アーミナイフのノコギリ刃で下すのも良い) コップフェル中央に置き、好みの油をかけます。それから極弱火でゆつくり温めます。キツネ色になればOK。こうするとニンニク口臭も防げます。辛さを出すペペロンチーノ(唐辛子)は焦げやすいので油で温める後半に入れ黒くなる前に取り出します。決して強火で炒めてはなりません。これで好みの具材を炒めれば必ず美味しくできます。

最後に洋麺好きから一言。スパゲティとパスタを混同してはいけません。パスタは英語読みすればペーセントとなり粉練品の総称です。マカロニもビザもパスタなのです。

関東 オートキャンプ場 なら 桐の木平キャンプ場 溪流サイト 団体専用あり

桐の木平キャンプ場

〒378-0102

群馬県利根郡川場村川場湯原2681

tel 0278-52-2442

電話、弱电工事

プモリ電設

〒379-2223

伊勢崎市小泉町 252

☎ 0270-62-2012



(有) 山とスキーの店 石 井

DreamBOX

伊勢崎市宮子町 3448-2

TEL 0270-21-8025 FAX 0270-21-8026